

特集 塩谷朝業と矢板

文武両道に優れ、鎌倉幕府3代將軍源実朝の供奉人にんに選ばれ、將軍の側近として仕えた初代川崎城主、塩谷朝業。（以下、「ともなり」。）特に和歌に優れた才能を持つ「ともなり」は、和歌を通し、將軍実朝とは將軍と供奉人の関係を越えた親しい間柄でした。

今年から市のキャラクターとなった「ともなりくん」や優れた歌人であったことになみ平成7年の国民文化祭で市が短歌の会場となったり、平成12年2月からは、「ともなり文芸祭り」が開催されるなど、市内には、「ともなり」をいたるところで目にすることができます。

今号では、800年余の時を越え、ドラマに満ちた生涯を送り、現在の矢板市に多大な功績を遺した「ともなり」の人物像を探ります。



「法然上人行状絵図」から馬に乗る信生（塩谷朝業） 資料提供／京都知恩院

「ともなり」の誕生

豪族の二男として
京都で生まれる

「ともなり」は、1174年、宇都宮業綱なりつなの二男として、京都で生まれました。

幼名は宇都宮竹千代。兄は頼綱で二人きりの兄弟です。祖父は、宇都宮朝綱なりつなです。

幼いころの「ともなり」

「ともなり」が生まれたころは、平清盛を中心とした平家一族が全盛をきわめ、祖父朝綱は、京都で大番役（天皇の御所を守る役）として、平氏に仕えていました。そのため、京都に館をかまえ、そこで「ともなり」は、6歳

源 実朝

君ならで誰にか見せむ我が宿の
軒端のきばににほう梅の初花はな

うれしさもにほひも袖そでにあまりけり
わがためおれる梅の初花

塩谷朝業

ごろまで兄の頼綱、母、祖母とともに過ごしました。父業綱は、宇都宮で宇都宮家を治めていました。

京都文化と「ともなり」

「ともなり」は、武将としての弓道、馬術、学問などの教育を受ける一方、母は、公家の娘で、祖母とともに教養が大変高く、「ともなり」と頼綱兄弟は、豪族の若さまとして、恵まれた家族環境と京文化の中で育ち、和歌の才能を磨きました。

御家人、富強の
宇都宮氏

「ともなり」の生まれた宇都宮家は、

上の歌は

私の家の梅が、今年初めて花を咲かせました。この花をあなたよりほかに見せたい人がいません。どうぞ、初花をこらんください。

（源 実朝）

朝業は、この梅の花をくださったのは、將軍実朝であることがすぐにわかりました。將軍から梅の花をいただくだけでも大変なことです。そのうえ、心優しい和歌まで添えてあったのです。

これに感動した朝業は、

私のために梅の初花の枝を折って、お届けいただき、わが家は梅の香りがただよい、私の心はうれしさでいっぱいになりました。

（塩谷朝業）

という返事の和歌を作って將軍に届けました。

名門でした。源頼朝が鎌倉幕府を開くと、祖父の朝綱は大切な御家人の一人になりました。

また、宇都宮氏は、鎌倉幕府の東大寺再建、大仏修理の際に重要な脇仏を担当するなど、その富強（財力、兵力など）は天下に名だたるものだったようです。1192年、「ともなり」19歳、兄頼綱21歳の時、父業綱は37歳の若さで亡くなりました。二人は、祖父朝綱の意見を聞きながら、富強、宇都宮一族を治めていきました。

宇都宮竹千代から
塩谷朝業に

19歳の「ともなり」は、塩谷氏（矢板市）の養子に入りました。5代目の塩谷朝義ともぎに男の子がいなかったため、

宇都宮氏から「ともなり」を養子に迎えたのです。養父の塩谷朝義の「朝」と実父、宇都宮業綱の「業」を合わせ「朝業」と名乗りました。いよいよ「塩谷朝業」の登場です。

塩谷氏は、はじめ堀江氏といい、先祖は源氏の名將、源義家（八幡太郎義家）と言われています。その義家の子孫、頼純よりずみが、塩谷地方を治めるようになり、塩谷氏が始まったようです。

御前原城

塩谷氏初代頼純は、1120年ごろ、御前原城を築きました。

また、3代目惟頼よしかたは、現在の場所に木幡神社を建て替え、塩谷氏の氏神としたと言われています。「ともなり」が養子にきたころは、この御前原城か、館ノ川の館に住んでいたと思われます。